



自然との つながりを感じて Connecting with nature

木のために
スカウト活動を

地域から活動を

変革はここから

信仰と自然

大地に
足をつけて

生涯の仕事



TUNZA もくじ

～「TUNZA」とは、スワヒリ語で“愛をこめて大切にみつかう”という意味です～

TUNZA

インターネット上でも見ることができます。

英語版→www.ourplanet.com および

英語版→www.unep.org

日本語版→www.ourplanet.jp

<英語版> Vol.5 No.2

United Nations Environment Programme (UNEP)

PO Box 30552, Nairobi, Kenya

Tel (254 20) 7621 234

Fax (254 20) 7623 927

Telex 22068 UNEP KE

E-mail: unepub@unep.org

www.unep.org

Director of Publication Eric Falt

Editor Geoffrey Lean

Special Contributor Wondwosen Asnake

Guest Editors Karen Eng and Claire Hastings

Nairobi Coordinator Naomi Poulton

Head, UNEP's Children and Youth Unit Theodore Oben

Circulation Manager Manyahlesha Kebede

Design Edward Cooper, Ecuador

Production Banson

Printed in the United Kingdom

<日本語版> 通巻10号

編集兼発行人: 宮内 淳

編集・発行所: NPO法人地球友の会

東京都中央区東日本橋2-11-5 (〒103-0004)

電話03-3866-1307 FAX 03-3866-7541

翻訳者: NPO法人地球友の会 大井上恒男

翻訳協力者: 桑原百代

デザイン: Edward Cooper, Ecuador

制作: (株) セントラルプロフィックス

印刷・製本: (株) 久栄社

協力: 東京都中央区

協力: UNEP国際環境技術センター (IETC)

助成: 連合・愛のキャンパ

Printed in Japan

*「TUNZA」日本語版は、日本語を母国語とする人々のために国連環境計画 (UNEP) に代わって出版するもので、翻訳の責任はNPO法人地球友の会にあります。

*本誌の内容は、必ずしもUNEPおよび編集者の見解や政策を反映するものではなく、公式な記録内容でもありません。また、本誌で採用されている名称ならびに記述は、いかなる国、領域、都市やその当局に関する、あるいはその国境や境界線に関するUNEPの見解を示すものでもありません。

*本誌の無断複製 (コピー) は、著作権法上での例外を除き禁じられています。

*本誌は非売品です。

この日本語版は、「大豆油インキ」を使い、ISO14001認証工場において「水なし印刷」で印刷しています。また、省資源化 (フィルムレス) に繋がるCTPにより製版しています。本誌は再生紙を使用しています。



はじめに	3
希望を植える	4
木のためにスカウト活動を	4
TUNZAが答えよう	6
責任を担う	7
大地に足をつけて	8
生涯の仕事	10
学びへの誘い	11
エコロジー・イン・フォーカス	12
コン・リー、自然のスター	14
死にもの狂いで戦って	15
魅惑のカワイルカ、ボト	16
変革はここから	16
霊長類のパーティー	17
信仰と自然	18
危険に気づかない自己満足	19
ただの古いゴミの山じゃない	19
山頂の清掃	20
木々を緑に	20
地域から活動を	20
希望の停泊地	21
自然の7不思議	22
第3回TUNZA - NEAYEN会議 開催レポート	24

UNEPは、ドイツに本社をおくヘルスケア・農業関連・素材科学の世界的企業バイエルと連携して、若者の環境意識を高め、子どもたちや青少年が環境問題に関心を持ってくれるよう活動しています。

これまでアジア太平洋地域で10年近くにわたり、いくつかのプロジェクトを協力して行ってきたUNEPとバイエルは、パートナーシップ契約を結ぶことで、現在進行中のプロジェクトをステップアップし、他の国々にもその成

功例を広げ、若者のための企画を推進していけるようになりました。それらのプロジェクトには以下のものがあります。

機関誌「TUNZA」; 国際子供環境絵画コンテスト; UNEPとの共同によるバイエル青少年環境使節; UNEP・TUNZA国際青年会議; アジア太平洋青年環境ネットワーク; アジア太平洋エコ推進フォーラム; ポーランドのエコフォーラム; 東ヨーロッパでの写真コンテスト「エコロジー・イン・フォーカス」

UNEPは

環境にやさしいやり方を、

世界中で、そして同時に自分たち自身の行動の中で推進しています。

英語版は100%再生紙を使用し、

植物ベースのインクやその他

環境に配慮した手法を採用しています。

我々の方針は、流通にともなう

二酸化炭素排出量を低減することです。



Partners for Youth and the Environment





クールな、 そしてもっと クールなやり方 Cool & Cooler

かっこいい：ソファから離れること。最近の医学調査では、人は戸外で時間を過ごしたり、緑豊かな環境の中で活動したりすることで、心の健康が増進されると主張している。田舎を散歩するのはあなたのためになる！ 知ってた？

もっとかっこいい：緑地でのスキー。雪がなくても問題なし！ グラススキーをはいて、しもやけの心配のないスキーを経験するために丘に向かおう。キャタピラ式であれ車輪式であれ、このスキーは草の丘ならどこでも大丈夫。ただ、安全パッドを装着するのをお忘れなく——草は雪より固い。

かっこいい：再充電可能な電池で電化製品を使う。

もっとかっこいい：USBポートから充電できる電池を使う。カバーをポンと開けてコンピュータのUSBポートに端子を差し込むだけで、即座にコードレス充電が可能だ！

最高にかっこいい：太陽熱を利用する。太陽電池板を外面に埋め込んだバックパックは、4ワットまでの発電ができる——これは携帯電話のような小さいの小型電化製品を充電するには十分だ。電池には余剰電力を蓄積しておけるので、曇った日でも携帯電話は再充電可能だ。

かっこいい：ピクニックをする。

もっとかっこいい：生分解性の食器を使う。じゃがいもでんぷんやサトウキビのパルプから作ったナイフ、フォーク、スプーン、そして箸などは、ふつうの堆肥とほとんど同程度の速さで生物分解される。

最高にかっこいい：食器を使わずに自分の手で食べる。サンドイッチはいかが？

かっこいい：紙をリサイクルする。

もっとかっこいい：ハムスターの力を使う。トム・ボールハチエット (Tom Ballhatchet) 考案のハムスターが動かすペーパーシュレッダーを使えば、まさしく目の前でリサイクルが起こる。1匹の元気なハムスターが回すホイールはA4の紙1枚を40分で寸断し、あなたのゴミを自分の巣にしましょう。



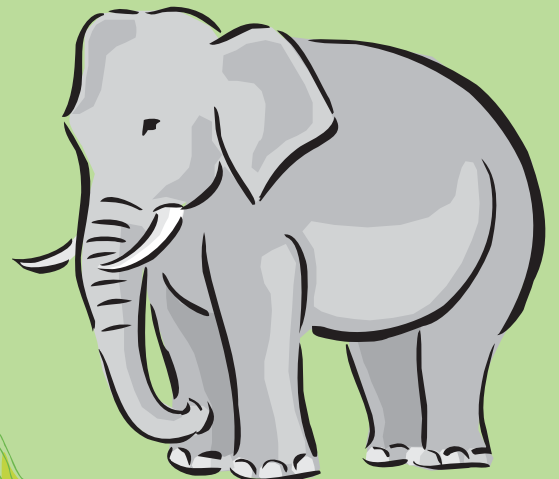
はじめに

EDITORIAL

人類の歴史のほとんどすべてにわたって——ほんの1世代か2世代前までは——人々は自然に親しむ暮らしをしていました。みな、そうしなければならなかったのです。生活は、果てしなくめぐる季節を中心に繰り返されていました。食材はおもにその地域で育てられ、収穫後まもなく、旬のうちに食べられていました。豊作は充足を、不作は欠乏を意味しました。天気の移り変わりは単なる世間話ではなく、生活を決定づける最も欠かせない要因のひとつでした。あらゆる国のほとんどの人々は、直接その土地で採れたもので生活し、その土地の活力や生産性に深く依存していたのです。

工業や都市の成長にともない、そして物の輸送が敏速になり、商業が盛んになるにつれて、この土地との直接の結びつきが失われ始めました。これは最初に工業国で、それから続いて多くの途上国で起こりました。いまや世界の人口の半分は都市に住んでおり、その比率は途上国を中心に、これからも増え続けることでしょう。余裕のある人たちは、世界中からの空輸によって、望む食材を季節にかかわらず手に入れることができます。調査によれば、都市に住む子供たちの中には、スーパーマーケットの棚にあるとは知っていても、牛乳は乳牛から、卵は雌鶏からできることを知らない子供もいます。しかし、たとえありがたいと思っていなくても、わたしたちは以前にもまして自然界に——われわれが呼吸する大気、飲み水、食糧を育てる土壌、工業が頼る原料を——依存しています。それを理解していようがまいが、世界の経済は全面的に環境に依存したままです。

大規模な自然界の破壊——森林の伐採、湿地帯の枯渇、土壌の浸食、生物種の消失、河川や海洋の汚染、そして気候変動——が、わたしたちと自然界をつなぐ意識の喪失と同時期に起こったのは決して偶然ではありません。しかし、地球が住むのに適した場所として存続し続けるためには、わたしたちがそのつながりを取り戻さねばなりません。もちろんそれは狩りをして獲物を集めたり、自ら農民に戻れというわけではありません。しかし、そうした生活様式を守っている人々の自然界との密接な関係を学ぶべきです。その本当の意味は、わたしたちの世代は自然界に敬意を払い、自然界に依存し続けることを認め、そして自然界の維持能力に合わせながら生活することを優先させるような自然界との新しい関係を作り上げる方法を編み出さねばならないだろうということなのです。





希望を植える Planting hope

ウミット・サワシュ・バラン *Umit Savas Baran*

わたしが国際コミッショナーをつとめるThe Scouting and Guiding Federation of Turkey (トルコのスカウトとガイドの連盟)は、これらの努力の一端を担っていることが誇りだ。アースデー、水の日、世界環境デー、クリーン・アップ・ザ・ワールド活動に参加するほか、トルコのスカウトたちは国内の大都市のほとんどすべてに植林をしてきた。そして2001年のボランティア国際年の直前に、ボル州——アンカラとイスタンブールの間にある——の複数のガイドやスカウトのグループが、2ヵ所の石切採石場をおおうために、数千本の木を植樹した。

2006年に、わたしはUNEPが新しく立ち上げた「地球のために植林を:10億本の木キャンペーン」について読み、国中にそれを広めた。この計画では2007年中に少なくとも10億本を植樹し、数百万ヘクタールの退化した土地を森林に再生することを目標にしている——これは各地のスカウトたちにとって、自分たちの植樹活動を登録したり、新しい植樹活動を開始したりする絶好の機会である。

トルコ中のスカウトやガイドの組織が植樹の実行を公約し、そのやり方を勉強し、地元でどんぐりを採集してきた。世界中の兄弟・姉妹組織もまた公約を表明してきている。今のところ、ケニアのスカウト組織は百万本の植樹を、ルワンダは5万本を、そしてわれわれトルコは1万1千本以上を公約している。オーストラリア、レバノン、そしてセルビアはそれぞれ1万本以上を、そしてバーレーン、バナン、ボリビア、カナダ、エクアドル、

なぜ木を植えるのだろうか？ するのは簡単なことだが、多くの利益がある。土壌の浸食を防ぎ、水を浄化して地下水を回復させ、野生生物に食べ物と住みかを、そして人々に燃料と薬を——さらに日陰を、風よけを、気晴らしを、歴史へのつながりを、そして精神的な安らぎを与えてくれる。その上、樹木は酸素を生成し、二酸化炭素を吸収することで地球温暖化防止に役立つ。

スカウト運動の創始者、ロバート・ベーデン・パウエルは、自然界を教室のように使って、若者たちにキャンプのやり方、食糧探し、そして森林の知識のような自給自足と責任遂行に役立つ実技を教えた。そしてスカウトたちは自然に敬意を払うとともに、自然を大事にする。植林と他の環境への対策は、多くのプロジェクトの中でも世界中の何万人ものスカウトのグループを特に引きつけ、よりよい世界を築こうとすることで、多くの場合ミレニアム開発目標(MDGs)促進につながっている。

木のために世界中でスカウト活動を Scouting for trees all over the world



レソトでは、スカウトたちは土壌の浸食を防ぎ、薪や材木を供給するために、国の森林局と協力して、2006年から2015年にかけて毎年11万本の木を植樹する予定だ。

カナダでは、彼らは全土にわたる大規模なイベント「Scoutrees (スカウト植樹)」を毎年運営し、スカウト活動の基金を集めるかたわら、30年間にわたって7千万本を超える木を植えた。

エチオピアでは、世界で最も多く森林が伐採され、砂漠化や干ばつに悩まされる国々のひとつとして、彼らは5万本の土着の木を植え、世話をしながら、人々に樹木の重要性や燃料用の薪の持続可能な使い方を教えている。

イギリス本国では、彼らはウッドランドトラストと共同で、スカウト運動100年目に当たる2007年中に10万本の木を植えようとしている。彼らは100ヵ所での「Centenary Gloves (百年記念森林)」——数千本の木々から成る土地固有の森林の新領域——の植林をめざしている。

インドネシアでは、スカウトたちは、2004年12月の壊滅的な津波によって荒廃したアッチェ州の再建を助け、経済と生態系両面の諸問題に取り組んでいる。1万5千本のマングローブの木を再び植えるのが最優先だ。なぜならその木々は海岸を守り、魚を保護し、地域住民を支えるからだ。ボランティアたちは流出した木々の代わりに2千本もの植樹をした。



トルコで木を植えるウミット氏

ハンガリー、インド、インドネシア、マレーシア、マルタ、メキシコ、フィリピン、ポルトガル、南アフリカ、英国、そしてアメリカ合衆国なども公約を行なっている。

2007年6月時点で、235万本以上が20ヵ国以上のスカウト組織によって公約されている。そしてこれが刺激となって、いくつかの他の組織もまた植樹を公約し実行することになった。全部で10億本を超える木がこのキャンペーンのために公約され、2千2百万本以上がこれまで実際に植えられてきた。1年で10億本という目標が達成されれば確かに偉業だが、それはまだ必要とされるほんの小さな一部にすぎない。過去10年間の森林の消失を埋めあわせるためには、次の10年間にわたって何と1億3千万ヘクタールに1千4百億本の木を植える必要がある。世界の全スカウト組織を合わせても、これにほんの突破口を開いたにすぎないが、われわれはこの世界を、気づいた時より少しばかり改善された状態にして後に残すため、先頭に立っていることを誇りに思っている。

メキシコでは、彼らはしばしば森林再生プロジェクトに参加している。過去の例では、モナルカ蝶保護区、チャプルテペック森林、そしてアラゴン森林がある。

タンザニアと近隣諸国では、彼らはダルエスサラームからナイロビへの15日の旅を計画し、持続可能な環境開発、麻薬の弊害、HIV/エイズ、そして平和教育などへの意識向上をめざしている。この遠征旅行は、地域社会の植樹運動への参加を目的としている。

ケニアでは、彼らは集水地域や降雨量の少ない地域をふくめて、3年間で1千万本の木を植える計画だ。スカウト一人ひとりがそれぞれ少なくとも36本の木を植えて世話をし、複数の養樹園も開設される。彼らはまた植樹および管理に関する一般大衆への意識向上プログラムの運営にも関与している。

オーストラリア・スカウト連盟は、環境保護組織グリーンフリートや車両メーカーのホールデン社と連携し、マレー・ダーリング流域での環境問題に取り組むプロジェクトを運営している。2001年以降、スカウトたち、彼らの家族、そして地域社会のメンバーたちが、ニュー・サウス・ウェールズ、南オーストラリア、ビクトリア、そしてオーストラリア首都特別区にわたってこれまで90万本以上の木を植えた。グリーンフリートが苗木を栽培し、優先度の高い植樹地域を指定し、そして用具を支給し、スカウトたちがその残りの仕事をこなす。

自然とのつながりを感じて



ストックホルム王宮

親愛なる友へ

世界中のスカウトたちは、自分たちの周囲の自然環境の価値を認めてきました。なぜなら彼らの冒険の多くが野外で行なわれるものだからです。その結果、数十年にもわたって、スカウトたちは環境の価値を高めたり保護したりする多くの重要なプロジェクトを実行してきました。

いまやスカウト運動は最初に発足して100年になり、そして今日では世界中で2千8百万人の青少年メンバーを擁し、彼らは間違いなく地球規模の環境活動における重要な戦力となっています。わたくしは植樹キャンペーンから地域社会環境でのゴミ清掃に到るまで、スカウトや他の若者たちが自ら運営する多くのプロジェクトを見てきました。

若者が一緒になって働けば、諸君は偉大なことを成し遂げる能力があります。どんどん前進し、そしてその違いを見せつけて下さい!

皆様のご成功を心から祈ります。

カール16世グスタフ
スウェーデン国王
世界スカウト財団名誉総裁



Q TUNZA が &

答えよう

A



環境問題について、
UNEPの専門家に
質問はありませんか？

unepub@unep.org まで

質問を送って下さい。

次号以降でお答えするように
努力します。

Q わたしたちはどのようにして自然との結びつきを失ってきたのでしょうか？ その過程を元に戻すことはできますか？

A 残念ながら、われわれのますます多くが映画、ハイテクなコンピュータ・ゲーム、そしてパーティに熱中するようになってい——つまり自然から離れ、室内でより多くの時間を過ごすようになってきている。しかしわれわれは、自然の生態系や風景が情緒的、身体的、そして精神的な健康に寄与することを知っている。われわれはテンポの速い発達した社会に距離を置き、自分たちの環境との結びつきを取り戻す方法を見つけねばならない。もっと戸外で活動する時間を作り、自然界がわれわれ自身と周囲の両方でどのように作用するのか学ばねばならない。

Q さらに多くの人々が都会に住むにつれ、どうすればそのような人々を自然と結びつけることができますか？

A 人々は都市環境に住むことで、確かに利益を得てはいる。しかしわれわれは、非常に多くの人々がきゅうくつな状況に住むことで生じる生態面への影響を、持続可能な都市計画——公園や遊歩道のような開放された緑の空間を作ることや、ゴミや汚染を抑制するよりよい環境基準の適用によって、緩和することができる。都市問題に取り組むために、また持続可能な解決法を導き出すために、アイデアを教え合ったり経験を分かち合ったりし続けることが必要だ。

Q 最も未開の原生地の、さらに奥深くに足を踏み入れるにつれて、最後の原始の自然環境を壊す危険をおかしてはいませんか？ そこは手をふれないまま残しておくべきでしょうか？

A われわれはそうした場所を探検すべきだ。原生の自然地域は素晴らしい休養と気晴らしを与えてくれる。そこは人類の過去の一部を成し、われわれに歴史や、異なるさまざまな生き方を垣間見せてくれる。そこは大気や水の質、そして生態系全般を健康な状態に調節し、改善する。そこでは過去の生態系と現在のそれとを比較することができ、将来起こりうる変化のいくつかを感じ取ることができる。しかし思い切ってそこへ入る時には十分注意すること、大いに敬意を払うことが大切だ。

Q 広大な野外には本質的に危険がひそんでいませんか？ たとえば鉄砲水、ヘビ、

クマ、落石、そして熱や寒気にさらされる危険性などです。健康や安全面での警告が出されるべきでは？

A もちろんそこには危険、障害、厳しい環境条件、そして予想できない自然の力などがある。しかし、広大な野外はさらに、すばらしくて忘れられない経験も提供し、自分の殻を破り、新しい可能性を発見したり伸ばしたりする機会を与えてくれる。われわれはルールを忠実に守り、安全指示に従い、そして常識を働かせることで、危険の多くを避けることができる。

Q わたしたちがみずから招いた生態系の問題を修復するのに、科学技術には頼りませんか？

A この点には非常に大きな可能性がある。しかしあいにく、多くの技術進歩は自然に対するさらなる衝撃となり、そして環境に非常に高い犠牲を強いる可能性がある。間違った種類の開発は、川を青から褐色に変え、密林を砂漠へと変貌させた。代わりにわれわれは、持続可能なやり方で開発を進められるような、環境にやさしい技術を探すべきがある。再生可能なエネルギー源は高価だと信じる人々もいるが、そのコストは激減しつつある。そして、もしわれわれがもっともっと多くの人々——特に若者たち——を研究や開発に引きつけることができれば、さらに多くの持続可能な解決法を見出すことだろう。

Q 自然とのつながりを取り戻す方法の手本は、どこを探せば見つかるでしょうか？

A スカウト活動はさまざまな手本を示している。他の手本は学校の遠足や、植樹、バードウォッチングなど、人々を野外に連れ出しやすい活動の中にも見出せる。

Q どうすれば青少年の野外活動を通じて、生態系や環境の問題に関してより広範囲の人々を教育できるでしょうか？

A 手本を示すことで、そして世界中の自分たちのネットワークとさまざまな開発プロジェクトを通じて青年たちが達成した成果を披露することで——そしていつも共に働き、互いに助け合うことで、よりよい世界の建設に打ち込むことによってそれは可能となる。この地球はわれわれ皆への贈り物であって、一人ひとりの活動が社会全体に影響を与えるという認識を広める手助けをしなければならない。

毎年、バイエル社と

UNEP共催のエコマイ

ンド・フォーラムにはアジア太

平洋地区の9カ国から若い科学

者、エンジニア、社会学者、そし

て経営の専門家が集う。エコマインド

2007——それは多分野にまたがる持続可

能な開発に焦点を合わせている——の前に

TUNZAは二人の代表者たち:タイで環境管理

を専攻する学生パカポー・カンタパスラさん

(PK)と、韓国で生物学を専攻する学生

ヒョク・ヨク・キムさん(HYK)に話を聞いた。

TUNZA:生態学の問題にひかれた理由は何かですか?

HYK:小さい頃、わたしはカタツムリや昆虫、カエルを何時間も観察して過ごしました。それで、鶴が石油まみれになっている写真を見た時、わたしは地球で起こっている出来事の原因を取ることを考え始めたのです。

TUNZA:あなたがたの国の若者たちは、自然界やそれが直面する危機に気づいていると思いますか?

PK:ほとんどのタイの若者たちは学校で環境問題について学びますが、その多くが、これらは政府や国際機関が対処すべきことだと思っています。皆、個人ではそれらを解決するだけの大きな影響力を発揮することはできないと感じています。

HYK:韓国では、環境問題に関心を寄せる若者たちの人数は増えてきています。地球温暖化とそれに伴う異常な気象の現象は、韓国の重要な問題——エネルギー危機と同じくらいに重要です。わたしたちの国は高度に工業化されており、石油の輸入に依存しているからです。わたしたちにとって、自分たちが意志決定者になる以前から、環境危機を意識することが大切なのです。



Pakaporn Kantapasara

TUNZA:勉学を通じて、あなたがたの自然界に対する考え方や感じ方はどのように変わりましたか?

HYK:鳥の生態系を観察し研究することは、自然の構造がどんなに複雑にからみ合っているかを認識するのに役立ちました。生息地を破壊することは非常に危険です——わたしたちは自分たちの行動がおよぶ範囲やその影響については、決して正確に知ることはできないのです。わたしは時々、次の世代は現在の多様な鳥やカエル、そしてその他の生物種を見ることができのだろうかという疑問に思うことがあります。

責任を担う

Taking responsibility

ます。わたしたちが環境を考慮しなければ、開発は決して持続可能なものとはなりません。

HYK:人間は、すでに地球がやりくりできる以上の資源を搾取しています。わたしたちは自分たちのニーズに合った再生可能なエネルギー源を利用しなければならぬし、汚染や過度の搾取を防ぐ技術を作り出さなければなりません。最も大切なのは生活様式です。わたしはリサイクル可能な容器に入った製品を選ぶ努力をしていますし、コンピュータを使う時には使用時間を減らすように気を配っています。

PK:わたしは次の10年間は、自分たちの技術知識を武器の開発や宇宙の探検に使うより、むしろ環境や絶滅のおそれのある生物種を守るのに使うことを希望します。

TUNZA:このエコマインド・フォーラムに対して、どんなことを希望しますか?

PK:地域の環境保全プロジェクトを直接経験し、また環境問題について同じような関心を持つ異なった文化背景の人たちと、アイデア交換のネットワークを築けたらと思います。わたしはエコマインド・フォーラムを、そして開催地のタイに来られる皆さんを歓迎することを、本当に楽しみにしています!

もう一息—ゆっくりと

GETTING THERE – SLOWLY

バス: バスは安く融通がきき、国内の旅行に便利だ。それが今やシドニーとロンドン間で、陸路バスにフェリーを組み合わせた新しい路線ができています。12週間で20カ国を通過するけたはずれの旅だ。その途中、旅行者たちはタージマハール、エベレスト山のベースキャンプ、東ティモール、そして都市から砂漠や熱帯雨林に至るまでのさまざまな環境を、かなりの部分をキャンプしながら訪れることができる。

www.bussstation.net および www.oz-bus.com 参照。

自動車: 自動車旅行は、自動車では近づけない景色を見たり、人々との出会いがあったり、そして足を休めてくつろぐことができたりする。バンコクからクアラルンプール行きの車で熱帯雨林や村落を通る。その他ドイツ、フランス、そしてスイスにわたるアルプスの景観や、砂漠や鉱山の町を通りオーストラリアを横断する、あるいは欧州から日本へシベリア鉄道で旅することさえ可能だ。世界で最長の鉄道網は、ウラル山脈、広大な樺や松の森林、凍ったツンドラ平原、ゴビ砂漠、そしてモンゴルの大草原を通り、全長9,000キロ以上におよぶ。

www.seat61.com 参照。

自転車: 自転車旅行はゆったりでき、旅を楽しむことに集中できる。数時間の旅から、国を横断する旅まで可能だ。市街路を抜け、田舎道を通り、森をぐぐり抜け、あるいは山を登る。もちろん身体が健康であることが前提で、自転車旅行者はルート、天候、装備、ビザ、そして宿泊場所を考えておく必要がある。しかしながら得るものは独立心で、道中に見たり経験したりすることがすべてだ。

www.cyclingaroundtheworld.nl および www.bicycle-adventures.com 参照。

船: 船旅で最も環境を汚染しないのは帆船での旅だ。時には個人用のヨットに便乗したり、手伝い役で乗せてもらったりできるが、貨物船のほうが利用しやすい。旅行者は貨物運送会社経由で船旅の手続きをし、乗組員およびその他11名までと航海に出る。スピードは遅く(たとえばカリフォルニアから日本まで13日間かかり、費用は日数で計算される)、食事付きで一人あたり100ドルが標準的な費用だ。しかし行き先は多様で、寄港地では上陸できる。そして、温水プールや舞台ショー、それにレストランまで付いた豪華なクルーズ船に比べて、貨物船から排出される汚染物はごく一部である。

www.geocities.com/freighterman.geo/mainmenu.html 参照。

チャリティー旅行は冒険と利他主義を組み合わせ、困難にチャレンジすることで募金を集める。たとえば野生生物を探してナミビアを徒歩で横断する、あるいはマチュピチュへのインカ古道を徒歩旅行するなどである。参加者は友人や家族にスポンサーになってもらってチャリティーのための資金を集め、旅の経費もそれでカバーする。

エクアドル領アンデス山脈の「火山通り」にかかる雲の中を登って登山したり、カリブ海へ向かってハバナから10日間の自転車旅行をしたり、ノルウェーの北極圏を犬ぞりで通り抜けたり、ベトナムで熱帯雨林や稲田地帯を乗馬して回ったり、ヒマラヤのカンチェンジュンガ山近くの果樹園、ツツジの森、そしてモクレンの咲く中をトレッキングしたりなど、例はたくさんある。

大地に足をつけて

目的地に急行するあまり、われわれはいまだに自動車やバス、あるいは船で、たいていどこへでも行けることを忘れてしまっている。ましてや自転車、あるいは帆船、馬やラクダに乗って、スキー、徒歩、犬ぞりでの旅行など、考えてもみない！



空の旅は——かつてはわずかな富裕層向けのぜいたくであったが——いまや何百万人もの人たちが、鉄道や道路を利用するよりはるかに安くできるようになった。しかしそれは同時に、最も急速に拡大しつつある温室効果ガスの発生源であり、地球温暖化に加担している。

いま、新しい傾向「スロー・トラベル(ゆっくりした旅行)」があらわれつつある。人によっては、これは目的地でより多くの時間を過ごすことだ——人々となじみになり、地域の動植物に親しみ、長い道のりを歩き、そして派手な観光アトラクションを次から次へと急いで回る代わりに、探検しながら旅行をする。そこには、空を飛ばずに、途中での体験や景色を満喫する時間をとる選択肢もふくむことができる。

陸路に行くことで、自然を楽しみ鑑賞することもできる。たとえば、カナダを列車で横断する旅では、北オンタリオ州の湖水地帯から広漠とした草原へと広がり、さらに壮大なカナダのロッキー山脈からブリティッシュコロンビア州の海岸に至る地勢が——旅のありのままの距離を実感させつつ——目の前に展開する。原野を探検したいと思えば、だれでも予定を変更して途中で一時下車することさえできる。ジェット機で飛び回る人たちは、これらすべてを見逃し——おまけに時差ボケにまでなる！

創造的の刺激を求める人たちは、スロー・トラベル・ブロッガーの冒険旅行をブログで追跡することができる。エド・ギレスピー(www.lowcarbontravel.com)は、2007年3月にロンドンの自宅をあとにして「世界を飛び越えたり、その上を通り過ぎたりするのではなく、

STAYING GROUNDED



Deia Schlosberg

その中を通り抜けるために」、陸路と海路による1年をかけた世界一周の旅に出た。彼の旅行は、ヨーロッパを横断してモスクワ、東南アジア、オーストラリア、さらにニュージーランド、ロサンゼルス、そして中央アメリカに至るもので、そこからバナナ運搬船に乗って帰国する計画になっている。

若い徒歩旅行者たち、グレッグ・トレイニッシュと元TUNZAのデザイナー、デア・シュロスバーグ(www.roadjunky.com/acrosstheandes; www.steripen.com/sponsorships/athletes1.html)は、2006年6月にエクアドルのキトから出発した。アンデス山脈に沿って南下し、ティエラ・デル・フエゴまで1年かけて歩くつもりだ。彼らはなお旅行中で、いまでは2年かける予定でいる。

デアはこう書いている。「可能な時はいつも、われわれは古代のインカ道をたどってきた。そこには、エクアドルのキトからペルー全土を通じてボリビアのラ・パスへ通じるカパック・ニャン道路網の一部もふくまれている。われわれは他のやり方では不可能だった、大陸と民族についてのまったく類を見ない理解に達しつつある。それは困難な旅だったが、寒い時、風が強い時、日照りの時、湿気が多い時、クモだらけの時、酸素不足の時などに、自分が自然とつながっていることを思い出して集中力を取り戻した。そこにあるのはよいものでも悪いものでもなく、単に実存する状態——すべて(現実)で、必要なものであり、美しいものだと気づいた」。

2006年9月に、当時27歳のエドワード・ジェノキオ(www.2wheels.org.uk)は、2年半かけてヨーロッパを横断して中国に至り、また戻って

る43,452キロの自転車一人旅を完遂した。この旅で彼は25の国々を通り、チベット高原で5,050メートルの高地にある峠を横断し、そして中国西部のタクラマカン砂漠にある海拔マイナス100メートル以下のトルファン盆地へと向かった。「ぼくが旅で学んだのは、地球をじっくりながめ、感じ、かつその匂いをかぐことだ」と彼は言う。「自転車には、感覚を外界からさえぎる窓ガラスなんかはないのだから」。

さらに28歳のバーバラ・ハッドリル(<http://babs2brisbane.blogspot.com>)は、ウェールズからオーストラリアへ陸路で旅行すると決めた時、新聞の見出し記事で取り上げられた。彼女は友人の結婚式に花嫁の付き添い役として招かれていたが、空の旅はしないと誓いを立てていたのである。そこで彼女は環境生物学者の仕事をやめて、ロンドンからモスクワへ7週間かけてバスで旅し、それからモンゴル経由北京行きシベリア横断鉄道に乗り、そしてハノイ、バンコク、シンガポール、メルボルン、プリズベンへと列車、船、そしてバスを乗り継いだ。驚いたことに、彼女は結婚式に間に合ったのだ。「わたしは旅行を終えて、いっそう地球の状態を気にかけるようになった」と彼女は語る。「いっそう愛おしく思ったが、いっそう気がかりになった」。

これらはおそらく極端な例だが、彼らは意志あるところに道ありということを実証している。最大のマイナス面は費用と時間で、それも目的地へ着くためだけでなく、計画にも必要だ。たとえば多くの国を通過して旅行するには、多くのビザが必要になるかもしれない。プラス面は、世界を自分で見、匂いをかぎ、味わい、聞き、そして感じる事ができるということだ。

生涯の仕事 A tusk for life

Chris Fourie/Dreamstime.com



「だれもが若いゾウを好きにならざるを得ません。彼らは聡明で、人間のよちよち歩きの子供に似ていて、その時の機嫌によって従順だったり、おとなしかったり、愛らしかったり、とても良い子だったり、かと思えばわんぱくで、強情で、そしていたずら好きです」と、デーム(Dame)の称号を持つダフニ・シェルドリックさんはTUNZAに語った。

1977年、彼女は亡き夫——評判の高かった自然主義者、野生生物保護主義者であり、ケニアのツァポ・イースト国立公園を設立して管理者をつとめた——を記念して、デビッド・シェルドリック動物孤児院(the David Sheldrick Wildlife Trust)を設立した。シェルドリック夫妻は孤児となったゾウたちを救い、手ずから飼育した最初の人たちである。今まで75頭以上が、リハビリテーションを経て野生環境への復帰に成功している。この孤児院は、親をなくしたサイの救出や、わなにかかった動物の解放プロジェクトにもかかわっており、地域の教育や奉仕活動を支え、最も多くのゾウをかかえるツァポ野生生物保護区で、獣医師団を運営している。

調査、インタビュー、写真担当：アフリカ地区のTunza青年アドバイザーであるモーリス・オデラ、UNEP青少年部のインターンであるクローディア・ハッセ、デビッド・シェルドリック動物孤児院の支援者であるダニエル・コドレ-アレクサンダー。

デビッド・シェルドリック動物孤児院のゾウ保育所における飼育係は、ジャンボな仕事だ。ケニアのナイロビからすぐ近くの郊外にあるこの保育所は、家族をなくした——密猟者たち、人間との衝突、干ばつ、そして居住区の破壊などのせいで——子ゾウたちの世話をしている。

若いゾウたちは社会性が高く、スキンシップをとっても好み、母親や大家族たちを極度に慕う。だから、孤児になった時はすぐに絶望にひしがれてしまう。もし彼らを野生の群れに復帰させようと思えば、飼育のかたわら、その精神面の安定を保つことが大切だ。それゆえ、飼育係たちは母親代わりになって子ゾウたちにえさを与え、いっしょに遊び、病気の際は看病し、そして最低1年は添い寝さえしてやらねばならない。

ゾウと飼育係はひとつのグループ——大家族——を作る。そして、その飼育係は、自分たちの世話を交代し合って毎晩違ったゾウのとなりで寝る。そうしないとゾウたちは特定の飼育係に愛着心をいだき、もしその飼育係が姿を見せないと精神的に傷ついてしまう。

ナイロビ近くの保育所で1年過ごしたあと、若いゾウたちはタンザニアとの国境に近いツァポ国立公園にあるリハビリセンターに送られる。そこで年上の孤児のゾウと合流して野生環境への復帰——その過程は最長で10年もかかる——を開始する。センターでは年上の孤児のゾウたちが、若いゾウたちを野生環境に徐々に再び慣れさせていくが、人間の家族と離れる時期はそれぞれのゾウしだいだ。また、離れたあとも次の数十年にもわたって、ゾウたちは担当の飼育係や仲間の孤児のゾウたちを訪ねて戻ってくるのである。

飼育係は何でもこなす連中だ。ジョン・ジェルは、ケニアの主要な農業地帯のひとつでゾウの生息数が多いメル市で育った。「若いゾウはちよど人間の赤ちゃんのようなものだ」と彼は言う。「晩にはお腹のすいたゾウの小さな鼻に3時間おきに起こされる」。昔、彼とその仲間の飼育係は野生の中で、子ゾウたちの中の1頭をねらうライオンと向かい合ったことがあった。「ぼくはあんなに早く走ったことはなかった。でも幸い、もと孤児だったメスの家長があらわれて難を逃れたよ!」

Claudia Hasse



学びへの誘い^{いざな}

Inspired to study

ディーパニ・ジャヤンタ Deepani Jayantha

スチーブ・カドゥリは、人間とゾウの衝突が頻発^{ひんぱつ}していたタイタ・テベタ地区で、中学の野生生物クラブのメンバーだった。今では彼は自分の地域社会で、どうやって野生生物を保護し、ゾウたちと仲良く暮らせるかを教えている。最も新米の飼育係であるサミー・ソコティは、野生動物を大事にする放牧部族の出身だ。始めはお金のためにその職にひかれたが、しだいにゾウたちに愛情を感じるようになった。「雨でも天気でもやって来るんだ」と彼は言う。「仕事を続けなければ、このかわいいゾウたちの成長は止まらないからね!」

最も年長で経験の長い飼育係のミシャック・ズインビは、19年前に18歳でこの仕事を始めた。彼の住むマクエニ地区では土地がやせていて農業に向かず、人々は食糧のために野生動物を大幅に減少させてしまっていた。自身の経験から、ミシャックは捕食動物を恐れない。「ぼくを一番悩ませたのはスイギュウだ。彼らは恐れを知らず、おびやかされていると感じれば、たやすく人を殺す」。彼はスイギュウに出会うといつも特別な注意を払う。特に子ゾウたちといっしょの時はそうだ。成長した孤児のゾウたちなら、守ってくれると知っているから安心できる——ちょうど彼らがゾウたちを育てていた時に気をつけてやったのと同じように。

彼は60頭のゾウたちを育てた——お気に入りにはデカで、現在20歳、身長は3.65メートルだが、彼女は今でも野生の中でミシャックに出会うとあいさつしてくれる——そして多くの群れが、特にもと孤児だったゾウたちによって形づくられるのを見てきた。「彼らのきずなはとても強く、お互いのためなら何でもするよ」と彼は述べる。さらに、「人間のあいだでは他人の幸せのために、ここまで世話や心配りがなされるのを見たことがない」と付け加えた。

「ぼくは二つの家族を持っている」と彼は言う。「ひとつはゾウたちの家族で、もうひとつは妻と子供たちだ」。彼の人間の家族は、彼が動物の家族にとっても愛着を持っていて、自分が自然と一体だと感じていることを知っている。

サミー・ソコティ(左下)とジョン・ジェル(右下)および彼らの担当している2頭/ケニア、ナイロビのデビッド・シェルドリック動物孤児院の保育所にて



自然とのつながりを感じて



Deepani Jayantha

子供のころ慣れ親しんだ自然とのかかわり合いが、わたしを自然学習へと誘ってくれた。わたしはスリランカ——多様な生物種と環境をとにもするのが当たり前^{あたりまえ}の場所——で生まれ育ち、中学の時にコロombo市にあるスリランカ国立動物園に所属する子供動物学者協会(Young Zoologists' Association)に入会した。そこでわたしは、自分の宿命は野生動物を保護するために働くことだと悟った。大学で獣医学を専攻し、特に爬虫類とゾウに関心をいだくようになり、そこから野生生物種における獣医学面からの管理について多くを教えられた。

スリランカは、アジアでゾウが生息する国の中で初めて、孤児になったゾウたちを野生環境に復帰させる取り組みを行なっている。卒業後、わたしはゾウを一時的に預かるホームで訓練を受けた。そこは政府の施設で、孤児になった子ゾウたちの世話をし、自立して暮らせるようになるまで住みかや食物、医療を施し、他のゾウたちとも交わるようにしている。わたしは実習期間を終えた後、野生環境に復帰した子ゾウたちを観察する役目を任された。そして興味が深まり、博士号取得のために彼らの生態を研究し始めた。

これはすなわち、みずからの生活の半分を野性のゾウたちに囲まれて茂みの中で過ごすことを意味していた。それは忍耐と自然の掟^{まじ}についての知識を必要とした——わくわくするような経験だった。そこで最も報われたことは、野生ゾウのグループの中に解放された子ゾウたちがいるのを見ることだった。彼らは、ばらばらになった野生アジアゾウの遺伝子プールに貢献し、そのことでこの世界的に絶滅の危機にさらされている動物種の存続を助けることになる。

わたしは自分の経験から、獣医学専攻の学生たちが生物種の保護に関心を寄せることがいかに大切であるかを確信している。ペラデニア大学の教育補佐として、わたしは学士課程のカリキュラムに野生生物学と保護についての学科を導入した。そして2007年に、念願かなって英国ジャージー島にあるグレル野生生物保護財団で、絶滅危惧種の管理について学ぶ大学院課程に入学した。野生生物の保護が多くのレベルで前向きな変化への機会をもたらしている——それは生物種、居住地、生態系をふくんでいて、わたしはスリランカに帰れるという十分な見込みを持っている。

エコロジー・イン・フォーカス (生態系にピントを合わせる)

Ecology in Focus



技術者の生態学的な夢 ——コンクリート製の人

Zdenek Vesely (チェコ共和国)

「チェコ共和国では、若者たちは産業の発展に懸念をいだいています。たとえば、農地にスーパーマーケットを建てたり、ゴミの山が地球を汚したりしていることなどです。

わたしは、みんなに自然を守る重要性を警告するような写真を撮ろうと努めています。また多くのユースクラブで、自然指向の各種プロジェクトに取り組んでいます。わたしはプロの写真家をめざしているわけではありません。ただの楽しみで、そして自然とのつながりを保ち続けるためにやっているのです…」



朝もやを見守るもの

Jerzy Grzesiak (ポーランド)

「ポーランドには豊かな、そしてほとんど手付かずの野生環境があり、新しい話題や取り組みに事欠きません。写真の中でわたしは、自然の魅力を示し、人々にそれを守る必要性に気付いてもらうよう努めています。

写真撮影旅行では、わたしは日の出前の早朝に起床します。朝の自然はひと味違って、そう…病みつきになります。動物たちは活動的で、日光は柔らかく、風景はすばらしく見えます。物事をまた違った角度から見ることができます…」



自 然とのつながりを取り戻すあらゆる方法のうちで、写真は自然環境に与える悪影響を最小にとどめることができるもののひとつだ。われわれのまわりの世界を静かに観察しながら、写真家たちはわれわれのものの見方に挑み、めったに関わることのない人や場所に対して心を開かせるようなイメージをもたらしてくれる。

2000年以来、UNEPとバイエル社による「エコロジー・イン・フォーカス」写真コンテストは、ポーランド、スロバキア、ハンガリー、そしてチェコ共和国出身の若い写真家たちの才能を引き出してきた。2006年にこのコンテストには「地球のさまざまな顔——現代技術、気候、そして責任」というテーマで、1,340を超える作品の応募があった。その最優秀作のうちのいくつかをここに披露する。

ニュース番組のために家に帰った

Hanna Novoszath (ハンガリー)

「鳥たちは人間に似ています。彼らはニュース番組を見逃さないように、テレビにかじりつきます。実は、動物たちは人間の環境に適応し、わたしたちが残した設備を利用しているのです。」

両親は、いつもわたしをハンガリーの魅力的な場所へ連れて行ってくれます。わたしたちが旅行する時には博物館やお店を訪れるだけでなく、同時にすばらしい公園や風景をたずねて時間を過ごしました…」



審美眼の荒廃： その出発点と終局点

Pavel Smejkal (スロバキア)

「この写真は、わたしたちの自然に対する理解が荒廃していることを物語っています。安っぽい人工の気晴らしを基に自然界を理解し始めた場合に、何が起るかを示しています。」

わたしは創作写真研究所で学んでおり、その分野で腕を上げたいと願っています…」



コン・リー、 自然のスター

Gong Li,
a natural star



中国の女優、コン・リーは、国際派の映画スターであるだけでなく、環境活動家でもある——故国の中国のみならず、その活動をすでに世界へと広げている。

「中国北東部の済南市で育った幼少時代、わたしは将来政治顧問として、政府に環境面で断固とした態度をとるよう要請するなどとは思いませんでした」とコン・リーは語る。2007年の初め、『紅いコーリャン』のような芸術派大作や、ハリウッドのヒット作『SAYURI』に出演したスターは、「環境を守るには、まず自分から始めよう」と題する政府の提案を発表した。

提案では、下水やゴミの問題に焦点が当てられており、中にはあまりにも単純すぎるとの批判の声もあった。しかし中国政府は次のように言った。「人々の声を反映している限り、それは良い提案です。コン・リーは自身の経験から、そして自分がよく知っている事柄から環境への懸念を表明し、環境保護という大きな命題に小さな出発点から取り組み、皆に行動を起こそうと呼びかけているのです」。

1998年以降、コンは中国人民政治協商会議の委員に選ばれた。これは年に2週間の会

合を持つ、社会のあらゆる層を横並びに構成した政府諮問機関である。彼女の提案は、倫理的な理想を促進しようとする最近の努力の成果だった。2000年、彼女はユネスコの「平和を願う芸術家」に任命され、文化面での架け橋を築くのを手伝うとともに、国連食糧農業機関(FAO)の大使にもなって、世界の飢えとの戦いを助けることとなった。

コンは、悲劇的な境遇下に生きる強い女性たちの役を演じてよく知られるようになった。中国の大衆は最近、彼女を全国民10億人強の中で最も美しい人として選出した。19歳の演技学校の生徒だった頃、彼女は映画監督のチャン・イーモウに出会い、彼の最初の作品である歴史大作『紅いコーリャン』の主役に抜擢された。二人の共同デビュー作は1987年のベルリン映画祭で金熊賞を受賞し、彼らを一気に名声へと導いた。二人は以後10年にわたり、共同であと6本の映画——『菊豆(チュイトウ)』と『紅夢』をふくむ——を生み、中国映画は世界に通用するとの評判をもたらした。

彼女は過去20年間に30本近くの劇場用映画に出演し、ヴェネチア国際映画祭とニューヨーク批評家協会から最優秀女優賞を獲得

した。彼女は今やハリウッドの常連となり、2005年の『SAYURI』の映画化に出演して躍進をとげた。この映画で彼女は、ごうまんて嫉妬深い芸者初桃の役を演じている。以降、『マイアミ・バイス』や『ハンニバル・ライジング』に出演し、中国の格闘時代劇『Curse of the Golden Flower (カース・オブ・ザ・ゴールデン・フラワー)』で主演した——これは10年ぶりのチャン・イーモウ監督との作品で、4,500万ドルという、これまで製作された中国映画で最も費用をかけたものとなった。

彼女の環境への関心は、自身の故郷である済南市における汚染の経験から始まった。そこで彼女は下水や余剰ガスが適切に処理されていないことを知った。済南市は古代からの泉が多いことで有名だが、いまや干ばつと産業による過度の地下水汲み上げにおびやかされている。たとえば、「天下第一泉」とも呼ばれる2,600年の歴史を持つ趵突泉は、1999～2001年にかけて2年半のあいだ水流が絶えていた。憂慮した市当局は水の節約キャンペーンを展開し、市民と産業経営者の両方に協力を要請した。

コンは現在北京に住んでいるが、国内のゴミの山にも注意を喚起した。「中国の都市

死にももの狂いで 戦って Fighting like hell



Lauren Prince

国際環境学の学生であり、WWF(世界自然保護基金)でボランティアをしているローレン・プリンス(22歳)は語る。

わたしは生後18ヵ月で初めて木登りをしました——堂々たるモクレンの樹で、丈夫な枝が広がり、天国のような香りの花が庭を芳香で満たしていました。以来、この樹はわたしの避難所となり、日常生活の騒音と混乱からつかの間の休息を与えてくれました。この樹の枝の中に囲まれていると、わたしはいつも守られているような気分になり、あたかも木の葉自体が目に見えない力を持った結界となって、外界の仕事や批判を撃退してくれるように思えたのです。

成長するにしたがい、わたしは次第に他の聖域——自然とじかに接触する安らぎをただちに感じられる場所——を求めるようになりました。こうした場所は、自然そのもののように多様な形であらわれます。たとえば都市の屋上、野菜市場の散策、午後のピクニック、小川のせせらぎ、あるいは山岳地でのキャンプなどといった形です。

ほとんどすべての人が、このような場所、自分だけの聖域を持っています。アル・ゴアもそうです。ゴア氏は若者時代の大部分を都市で過ごしました。しかし毎年、夏にはテネシー州の田舎町カルタゴにある家族の農園に帰ることにしていました。そこで、彼は人間と自然とのかかわりへの感謝の念を育てていきました。彼の表現では「われわれと自然とのかかわり合いというよりも、それはわれわれ自身なのです。われわれが自然の一部なのです」。自然界自体が危険にさらされていることを——そしてわたしたちもそれに巻き込まれていることを——彼が知ったのも、やはりここででした。最初、彼の祖父から知らされていた問題は土壌の浸食でした。数年後、レイチェル・カーソンの書いた『沈黙の春』が、殺虫剤のような化学物質に注目を集めました。しかし、今日の最大の環境面の難題は、はるかに大きな規模にわたるものです。

二酸化炭素の排出は、わたしたちすべてに影響する地球温暖化を引き起こし——飲料水となる川の流れを干上らせ、魚をとる海を汚染し、食用の植物を枯らし、そしてますます悪性の病を家庭にもたらします。わたしたちはこうしたことすべてを、地球資源の無思慮な搾取によって自らにもたらしたのです。しかし地球温暖化は巨大な可能性も秘めています——それは人類すべてを駆り立てる力を持っているのです。このように考えると、それはやっかいな脅威から、一転して人類の存続そのものの意義を明確にする機会に変わります。

わたしたちは皆、地球温暖化との個人的なつながりを理解しなければなりません。つまり、いかに各自が気候変動の原因を作り、いかにそれがわたしたちに影響するか、そして一番大切なのは、解決のために何ができるかということです。環境面で教育され、自らの力を発揮できる地域社会を作り出すという構想のもとに、アル・ゴアのクライメート・プロジェクト(The Climate Project)が考案されました。

昨年創設されて以来、このプロジェクトは世界中(オーストラリア、メキシコ、プエルトリコ、タイ、ウガンダ、そして合衆国)から集まった1,500人を超える人たちに気候問題に関する教育を実施してきました。そして帰国後、彼らは10回、あるいはそれ以上のプレゼンテーションを自ら行ないます。



Kashish Das Shrestha

わたしは、昨夏このプロジェクトのために働きながら、その効果を直接実感しました。いつも驚かされたのは、受講者たちのあふれんばかりの熱意、そして前向きな変化を作り出そうという真摯な姿勢です。それはわたしに希望を与え、わたしが自分自身よりずっと大きいものの一部であると実感させてくれました。

わたしたち人類は皆、地球温暖化を解決するでしょう。なぜならこの問題を通じて、わたしたちは一人ひとりが自然との生来のかかわり合いに目覚め、世界それ自体が聖域であることを思い出すようになるからです。しかし、わたしたちはそれに向かって死にももの狂いで戦う必要があります。

は年に1億2千万トンのゴミを出しています」と彼女は語る。「わたしたちの660にのぼる大・中都市の3分の1は、ゴミの山に囲まれています。多くの廃棄場所は不適切で、環境面でも健康面でも有害なものとなっています。田舎ですら、都会のゴミの廃棄場所となっているのです。もしわたしに時間があれば、これらのゴミの山の写真を撮って、それがどんなに危険なものか人々に知ってもらいたいと思っています」。

彼女は、中国の人たちは今までになく環境を意識するようになってきていると言い、教育が変化のための大切な最初のステップだと信じている。「たとえ自然が中国に環境面の難題を与えたように見えたとしても、人々が環境の大切さを認識し始め、今日から何かを始めれば、この国もうまく対処できると信じます」。

自分自身については、彼女はこう語る。「有名人は皆に影響を与えることはできますが、名声だけで人々に良い行動を起こさせることはできないと思います」。しかし彼女は付け加えた。「もしわたしが環境を考える大使になる機会があれば、喜んでその役割を引き受けます。公共の福祉に寄与できることで、とても幸せなのです」。

魅惑のカワイルカ、 ボト Bewitching boto

エレン・ミケッシュ(24歳)はマイアミ大学の海洋生物学部を卒業した。彼女は最近ブラジルに戻り、プロジェクト・ボトの実習生として働いている。これはアマゾンのカワイルカを生態学と生物学から長期にわたって研究するもので、マミラウア保護地区の中心に浮かぶ水上研究センターを基地として設けている。

「3千万年の昔、アンデス山脈が隆起する前に、カワイルカのボトはアマゾン水域に泳ぎ入り、以来彼らはずっとそこにいる。しかし今や、絶滅の危機に瀕している。

他のクジラ類から隔離され、ボトは河に住むためにユニークな特徴を備えるようになった。臼歯と円錐形の歯並びは魚をよく噛むのに便利で、さらに長くちばしは、森が浸水した時に水中の木の枝の間にひそむ魚を捕らえるのに役立っている。しかし、人々を最も魅了するのは彼らの色で、何とピンクなのだ！ 生まれた時は濃い灰色だが、ボトは成長するにしたがって自然に色素を失い、ピンクになる。傷跡の組織もピンクであり、最もピンクなのは大きな成長したオスであることから、オスの間ではおそらくメスをめぐって、多くの内輪の戦いが起こっていると思われる。

アマゾンの数万ものボトが生き延びてきたのは、民間伝承のおかげである。この地域の伝説では、ボトは地域の娘たちに求愛する金髪のハンサムな男だ。娘たちが恋におちると、男の姿をしたボトは彼女たちを水中の都市に連れて行き、二度と帰ってこない。その結果、人々は伝統的にボトを恐れ、避けてきた。しかし時代が変わり、伝説の重みが薄れるにつれて、ボトはしだいに魚のえさとして殺されるようになってきた。法律は彼らの殺りくを禁じているが、強制力は弱い。

この捕らえにくい哺乳動物を研究することは容易ではない。われわれは日に7時間かけてこの河川系を探索し、標識がついた動物を識別する。プロジェクト・ボトでは、437頭のボトに、害を与えたり傷つけたりはしないが識別可能な印を付けた。

最も近い町でも船で45分かかる距離に離れているが、そこは静かな場所ではない。魚がはね、鳥がさえずり、コンゴウインコが金切り声を上げ、果実が水中にドボンと落ち、猿がチーチーと叫ぶ——あるいは種類によっては遠ぼえをする。われわれの水上の家は水面でたえず弾んでいて、底板はさしみ、風がささやき、木々が揺れ、動物たちが音を立てる。まるで地球が息づかいをしているようだ。

たまに、観察の1日がちょうど終わろうとしている時、1匹のボトが水面にあらわれ、特徴のある人間に似た呼吸音を立てる。その後でもうひとつ呼吸音、それからもうひとつ。20メートル先に、体が水面からせり上がり、そしてゆっくりと再び沈む前に陽を受けてかすかに光る。突然、どこからともなく、小さなボトの群れが20頭のイルカに変わり、水しぶきを上げ、お互いの上を飛びかき、魚を追い、われわれの船の下で泡を吹く。アマゾンには二つの極限状態がある。生の極限と死の極限だ。自然のサイクルには何という美しさがあるのだろうか」

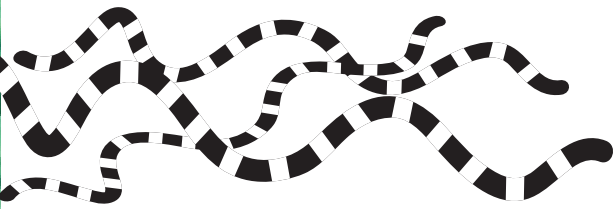


B Karwasz/Still Pictures

変革はここから

持続可能性と教育との間には強い関連性がある。最大の障害は知識の欠如だ——人々は自分たちの環境を破壊したいと思っているのではなく、ただ自分たちの行動がより広い世界に影響を与えていることを理解していないだけなのだ。だからわれわれ自身の行動について、意識を向上させることが不可欠であり——それはお互いを、世界を、また自身を尊重する念に基づく継続的な学習プロセスである。われわれ若者は、自分たちが変革のための効果的な仲介者になれることを自覚する必要がある。それでほくは、人々がいっしょになって助け合い、お互いから学び合うようなユースクラブをいくつか設立し、広めようと努めている。

われわれはルワンダで、毎月最後の週に地域社会の誰もが地域の



霊長類のパーティー

Primate party

2006年に、21歳のジャーナリズム科の学生であるコリンヌ・アイゼンリングは、北部マダガスカルで、世界的な環境保全組織である世界自然保護基金(WWF)のボランティアとして働いた。

「何百人もの子供たちが、歌ったり、'キツネザルを守ろう'と書いた小さな垂れ幕を掲げたりしながら、小道を下って行きます。彼らはマダガスカルの北西部にあるアンチラベで5日間開催されるキツネザル・カーニバルに向かって行進しているのです。わたしは彼らとともに3日間歩かなければ外界と接触できないところにいました。

わたしはマダガスカル語はほんの少し単語を知っているだけですが、いっしょに歌おうと努めました。WWFの5人のボランティアのひとりとして、わたしは人々に森とそこに住む動物に対する責任を感じてもらうためのこのカーニバルの運営を手伝いました。かつては、この巨大な島のほとんどすべてが熱帯雨林でしたが、今ではその10%も残っていません。すべての種類のキツネザル——マダガスカルとその周囲のいくつかの島々に特有の霊長類——は絶滅危惧種であり、中にはすでに絶滅してしまったものもあります。

皆がつどい、歌い、そして踊り、子供たちだけでなく周辺の村々や地域からの人々も加わります。日ごと千人を超す人々が、キツネザルダンスに、キツネザルの詩に、そしてキツネザルの歌に、さらにキツネザルのスポーツやクイズゲーム、スピーチ、そして討論に参加するのです。

森は、新しい米作の畑を作るために広い面積にわたって焼かれて消滅していきます。しかし、森は小屋のための木材、ストーブの燃料、食物や薬を与えてくれるので、動物と同様人々にとっても欠かせないものです。

キツネザルへの意識向上のための5日間を過ごしたあと、わたしはとうとうこの動物の何匹かを見ることができました。3日の間、われわれ少人数のグループは、マルジェジー国立公園の森の中、6匹のシルキー・シファカ(学名*Propithecus candidus*)——と、かわいい、幼いのが2匹——の後を追いました。時には、小さな山道はとてもけわしく込み入っており、ひとつひとつ木の幹につかまって這うように進まねばなりませんでした。しかし、それにもかかわらず——そしてヒルに悩まされたものの——それはわたしの2ヵ月にわたるマダガスカルの冒険旅行の中でも最高の経験でした」



Jeff Gibbs



Corinne Eisenring



Corinne Eisenring



About Byukusemwe/UNEP

Change starts here

清掃に参加するプロジェクトを運営している。ゴミをリサイクルしたり削減したりすることは、どの若者にもでき、地球の資源を節約し、そこに住む人々の生活の質を向上させるのに役立つことのひとつだ。

ほかには地域の学校の校庭で野菜を栽培し、貧しい家庭に供給するプログラムもとりまとめており——そしてもうひとつ、学校を中退した若者たちを特別クラスに出席させ、実用的な読み書きや算数、技能を修得させるプログラムもある。

ルワンダ住民は、環境の持続可能性の確保をふくめたミレニアム開発目標(MDGs)の達成に向けて活動する意志を表明している。2020年までにわれわれは、環境資源の損失をプラスに転じ、飲料水が入手できない人々の比率を減らし、スラムに住む数億の人々の生活を著

しく改善させることを可能にする。必要なのは決意と意識だけであり、それがTUNZAプログラムにおける意識向上のために働いている理由である。目標は、ルワンダの若者たちを積極的に参加させることだ。変革は常に個人から始まるのだから。

アブドゥル・ビュクセンジュは24歳、アフリカのTUNZA准青年アドバイザーである。彼はルワンダのキガリ自治大学でコンピューター科学を専攻しており、アフリカ基金FARMAPUでユースコーディネーターとして働いている。

信仰と自然

Faith in nature



Gregg Plummer/Flickr

ある活動家の教師が、かつてわたしの学校に話をしに来て尋ねました。「すべての宗教が共通に持っているものは何でしょう?」「聖なる存在への信仰でしょうか?」。わたしたちは答えました。「お祈りする場所? それと目的意識?」。「はい、ほとんどすべてが正解です」と、彼は嬉しそうに言いました。「しかし、そのほかにもあります…すべての信仰に共通するものはキャンピングです」。

それはイスラム教の巡礼者が伝統的にメッカへの巡礼の途中で行なうことです。またそれは、キリスト教の巡礼者がサンティアゴ・デ・コンポステーラ市へと旅する方法であり、さらにヒンズー教徒がガンジス川の水源への聖地詣での道中で睡眠をとる方法でもあります。またそれは、チベット仏教のラマ僧が今でも教えているやり方で——彼らは祈りの旗をひるがえらせた巨大なテントを山中にいくつも張り、信者はそのまわりにキャンプを設置します。

それはもちろん、巡礼の旅での宿泊設備の問題を解消する実際的な方法です。しかしそれはまた、'通常の世界'を一時休止させて自然の中で暮らす機会を提供してくれます。

ですから、スカウトたちが自分たちの百周年を祝うのと時を同じくして、宗教指導者たちが戸外活動を若者の教育の重要な一部として強く支持するようになってきたのは、別に驚くことではありません。戸外活動のおかげで若者たちは、自分自身と自然をよりいっそう知るようになります。多くのスカウト団体が、宗教を基盤に運営され、若者たちは焚き火バッジや野宿バッジの獲得を競うかわら、環境に配慮することの重要性を学べるような活動をしています。

清掃活動

宗教に基づいた活動をしている他のグループでも、特に都会育ちの若者が増えつつある中、戸外活動が若者を従事させる最善の方法のひとつであることを実証してきています。

2006年にモンゴルのケサル・サム(Gesar Sum)仏教寺院は、ウランバートル郊外の田舎でエコキャンプを始めました。町から来た数十人の若者と僧侶たちがゲル——伝統的なモンゴルのテント——の中で野外キャンプをしました。そして、町で最も汚れている地域の清掃活動を計画しました。「自然がいかに美しいか実感することが大切です。世話を焼く気になるように」と、ケサル・サムの僧侶であるムンクバートルは語りました。「実感する方法のひとつは、それを体験することです」。

英国のバーミンガムでは、グリーン・メディナのグループ——伝統あるイスラム教徒の町を指すアラビア名にちなんで命名された——も同様なことを試みており、参加者をひきつけるためにラップ音楽や映画カメラを加えています。町中の至るところからイスラム教徒の若者たちが、地域の道路や公園の清掃のためにワーキング・キャンプに参加するでしょう。

なぜなら「メディナをより清潔にすることはメディナの環境をより大切にすることだ」からです。「これらの子供たちの多くは町で生まれましたが、その両親たちは畑で仕事をしながら育ちました」と、この運動のスポークスマンであるハッジ・アイマン・アワフルは説明します。「イスラム教徒は清潔さに力を注ぎます——礼拝は沐浴なしでは正式なものではありません——ですからわれわれは、彼らが自分たちの環境に誇りを持てるようにしたいのです」。

アメリカ合衆国では、キャンピングはいくつかのキリスト教聖職者の職務の中で重要な要素のひとつです。特にメソジスト派では有力な手段で、この宗派は150年前には国内に建築物をほとんど持っていませんでした。伝道者たちは馬で地方を回って、切りっぱなしの板で作られた礼拝所で説教し、人々は何マイルもの距離から集まり、小屋やテントに滞在しました。アーカンソー州だけでも4ヵ所の古いメソジスト派のキャンプ場があり、現在でもまだ使われています。

レバノンの杉

時には、信仰と自然をつなぐ活動の成果が何十年後にしか出ないことがあります。一例が、「Alliance of Religions and Conservation (宗教環境連盟)」とレバノンの「Association for Forest Development and Conservation (森林開発保全協会)」が先頭に立った2004年の会合です。その狙いは、レバノンにおける主要キリスト教宗派である马龙派教会、バイルートのすぐ北にあるジュ

ニエ市の市長、そして二人の地域地主との間で協定を結ぶことにありました。問題となったのは400ヘクタールのハリッサの森——それぞれが部分的に所有者である——です。そこはレバノンの海岸沿いに残された最後の緑地帯のひとつで、地中海地域の生物多様性にとって重要な場所のひとつでもあります。

马龙派教会にとってそこは聖地です。ジュニエ市長にとっては評判の高いエコツアーの場所です。それで両者はそこの保全に神経をとがらせています。しかし、海岸線のその他の場所にすでに立ち並んでいるコンクリート造りの別荘群のような開発から、もしこの森を救おうとすれば、地主たちの合意が不可欠でした。結局、地主のひとり——リダ・エルカゼイと呼ばれる40代の男性——は、協定に合意のサインをしてもよいと言いました。そして彼の隣の地主も、同様にサインすることになりました。あとでわたしは彼に、自分の土地を自然のまま残すために多くのお金を手に入れるのを見送ったのはなぜか、尋ねました。

「少年だった頃、马龙派教会と提携していたスカウトのキャンプに行ったからです」と彼は説明しました。「われわれはそこで木を植えました。そしてそれはわたしの一番幸福な時代でした。あの森はわたしにとって、特別なものなのです」。

ビクトリア・フィンレイ「Alliance of Religions and Conservation (宗教環境連盟)」
(www.arcworld.org)



Sjoerd Moulisie/Flickr

危険に気づかない自己満足

A fatal complacency

「先進工業国にあっては、気候変動が地球を取り囲む壊れやすい貴重な大気におよぼす真の影響に対して、われわれの友人は心を閉ざすまいとすることができます。彼らの国で起こったとしても、その影響は——2005年のハリケーン・カトリナや2003年のヨーロッパの熱波は例外と言えるかもしれませんが——比較的害のないものでした。彼らにしてみれば風向きの変化を単に快く体感した程度なのです。

しかし、もし彼らが家族を養うために自然の循環に直接頼っていたとしたら、あるいはもし彼らがスラムやビニール袋で作られた小屋に住んでいたとしたら、その心配はどのくらい増すことでしょうか？ これはアフリカのサハラ砂漠以南の大部分で、現実の生活となっているのです。貧しく無防備で、そしてひもじさを抱える人たちは、毎日気候変動のもたらす厳しいぎりぎりの状況に置かれているのです」

デズモンド・トゥット大司教
2007年5月

ただの古いゴミの山じゃない Not just a load of old rubbish

「インドネシアが世界保健機関(WHO)から世界で最も汚ない国という烙印を押された時、それは注意をうながす警鐘となったのです」と、パニア・サントソとその仲間のウェニング・プラナヤはボルボ-UNEPアドベンチャー賞(Volvo-UNEP Adventure Award)の授賞式で

TUNZAに語った。彼女たちのプロジェクト‘よりよい将来のために役立つ廃棄物’は1等賞の1万ドルを獲得したのだ。「わたしたちにできるささやかな方法で、人々のものの見方を変え、地域の環境を改善するよう努めました」。

彼女たちの2年におよぶプロジェクトのおかげで、人々は進んで自分たちのゴミを分別し、有機ゴミは‘魔法のくずかご’とも呼ばれる堆肥製造機で肥料に変換し、無機ゴミは創造的に工夫して、一部はバッグや写真フレーム、みやげ物などの手作り品になった。

それはすべて2004年に、15歳の二人がスラバヤで地域のゴミ捨て場を訪れた時に始まった。そこで目にしたものが動機となって、彼女たちは3つのR——Reduce(減らす)、Reuse(再利用する)、Recycle(リサイクルする)——を、カセットテープやビラの配布、ワークショップや路上の案内、そしてコンテストの開催などを通じて広く知れ渡るようにした。彼女たちのメッセージは、ゴミを処理すれば庭用のすばらしい肥料になり、手作りの品はとても必要な収入をもたらす——健康や環境の危険となる投棄ゴミの量を減らすことができるというものだった。

結果は目をみはるほどのものだった——この少女たちのいる地方自治体でのゴミの量は、3分の1以上減った。ある近隣地区の人々は2トンの肥料を作り、みやげ物の販売で毎月1,000ドル近くを稼いでいる。市の他の区域では、ゴミの量が80%減った。彼女たちの運動が政府の手で国中に展開され、少女たちが大統領から賞状を受け取り、インドネシア版のギネスブックに記録されたのも当然のことである。



Yuen Kok Leng/UNEP/Topham

山頂の清掃

Clean-up summit



Claudio Marcozzi/JUNEP/Topham

野口健が26歳でエベレスト登頂を果たした時、彼は全世界の最高峰を史上最年少で制覇した人となった。しかし登頂の途中で、彼はもうひとつの天職を見つけた。仲間の登山者たちが、タバコの吸い殻から食べ物、薬、そして放棄された用具に至るまで、ゴミを道なりに残しているのに気付いたのだ。ヒラリーとノルゲイが最初に征服して以来、50年の間に、50トンを超えるゴミがこの山に残されたのである。

そこで野口——日本人の父とエジプト人の母を持ち、16歳の時に山登りを始めた——は、すべての山々に単に登るだけではなく、そこを清掃することを自分の使命とするようになった。エベレストに登った翌年、彼はそこのゴミを清掃する国際チームを組織した。7年にわたる5回の遠征の結果、数百もの酸素ボンベをふくむ約9トンのゴミを回収した。

彼はまた、日本が有する富士山を清掃する同様のキャンペーンを開始し、同時に人々がゴミを拾う気持ちになれるよう努めた。富士山はほとんどその汚れない本来の状態に戻っている。

しかし、その成果にもかかわらず、彼は自分のやったことは単に突破口を開いたにすぎないことを知っている。「単に山からゴミを集めるだけでは成功したことはありません」と彼は言う。「世界最高峰のエベレストの上でも、とほもない量があります。地球全体ではいったいどれだけ多くの量になるか、想像してみてください。できるだけ多くの人が、わたしのやっていることを見て、自分たちのまわりのゴミに、そして自然の美しさと環境のすばらしさに、もっと気づくようになってほしいのです」。

木々を緑に Greening trees

「若者にとって大切なのは、たとえ都会に住んでいても、自分たちの行動が良かれ悪しかれ、環境にどのように影響するかを理解することです。わたしは学校で、皆が原材料の消費を減らし、再利用し、そしてリサイクルして環境を救うことができることを知らせるプロジェクトを計画しました。自分たちが言ったことを実行できるように、皆が必ずリサイクルのための分別容器を持つようにしました。わたしたちの学校のまわりでは、すでに変化が起きています。ゴミが少なくなり、生徒たちが定期的に水をやるので木々は緑を増えています。それが小さなことだとわかってはいますが、ひとつの貢献なのです」

リオール・コレン、15歳、イスラエルの高校生



地域から活動を

世界中で、若者たちが午後のハイキング、夏のインターンシップ、あるいは学級でのプロジェクトのようなシンプルな活動を通じて、地球をきれいに掃除するために準備を整えつつある。

たぶん絵葉書の写真が良くできすぎているせいだろう。時にはある場所に対するわれわれの理想像は、現実には当てはまらない。たとえばキャシー・ボルドローは、ペルーのシエラ山岳地帯の真ん中でゴミを焼く悪臭をかぐとは思ってもいなかった。そしてアズミル・イクラムは、マレーシアのスアン山の高地で破棄された酸素ボンベや登山ロープをたびたび踏み越えることになるとは思ってもみなかった。しかし、二人とも今ではそれを何とかしようとしている。

夏期インターンシップの一環として、キャシーはリマの北東にある小さな村、ジャンガスをきれいに掃除しようとする若者たちの手助けをした。2006年7月に、彼らはたくさんのゴミが川に捨てられたり、通りに投げ込まれたり、あるいは庭に積み上げられたりしているのを見て、Asociación para un Medio Ambiente Saludable (AMAS)という団体を作り、環境を考えた廃棄物管理計画を立てた。彼女は彼らを手伝い、昔からの堆肥製造の方法を再導入し、地域清掃の日を組織した。

彼女は地域社会での情報および教育キャンペーンが成果をもたらすことを知った。「AMASのメンバーたちがプロジェクトにささげる献身とエネルギーを持ってすれば、自信を持って言えますが、数年のうちに彼らはゴミ処理センターを創設し、そこでリサイクル可能なものをより分け、有機ゴミを分解して堆肥にする夢を実現できるでしょう。次のステップは温室を作り、堆肥を使って地域の絶滅に瀕している植物種を大事に育てることになるでしょう」。

地球の反対側で、アズミルは語る。「マレーシアは良い環境保全法を持っているのに、人はしばしばそれらを無視する。多くの登山家、ハイカー、そして旅行者たちが、高さ1,493メートルの熱帯雨林で知られるヌ



Resmi Seenan/UNEP/Still Pictures

希望の停泊地

Harbouring hope

それは1989年の昔、クリーンアップ・シドニー・ハーバー運動として発足した。その後、それはクリーンアップ・オーストラリア・デーとなり、7百万人を超えるボランティアを集め、数年の間に推定16万5千トンのゴミを集めた。さらにそれはクリーンアップ・ザ・ワールド運動に成長した。2007年3月、エイミー・ラブシーはそのすべてが始まった場所に飛び込み、この運動に参加した。

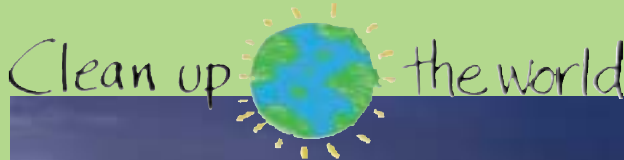
「色彩に富んだ植物や動物を見ると、わたしは海面のすぐ下の種の多様性に驚かされます。けれども海洋は、オーストラリアのような島国でもしばしば忘れられています。今、オーストラリアの人々は、港や湾に投げ込まれるものに関心を寄せ始めています。

わたしの場合は、地域のダイビングクラブからの友達数人とともに、シドニー港の清掃を助けるボランティア活動に参加しています。港の底にはとてもゴミが溜まっているので、それは大変な仕事でした。野生生物——鳥、イルカ、アザラシ、カメ、そしてクジラなど——が、ビニール袋をおいしいクラゲと間違えて死ぬこともあります。そして動物たちは釣り糸や漁獲網にからまるようになります。わたしはとてもきつく糸がからまって、くちばしが開かなくなった鳥を助けたことがあります。その鳥の羽には釣り針が深く刺さっていました。

わたしたちはたった1日で、ぞっとするほどの山となったゴミを集めました。網の大きなかたまり、ビニール袋、そしてタイヤなどのほかに、わたしたちが積み上げたタバコの吸い殻は小さな山になりました。これらは網のような今すぐ危険なものには見えないかもしれませんが、有毒な鉛やヒ素、水銀、そしてシアン化水素などをゴミの中に浸出させます。毎年、国内で70億本を超える吸い殻が捨てられ、多くの地方議会ではゴミ捨て規制法の施行を決定し、浜辺での喫煙さえも禁止しています。

浜辺や海を汚染しないで楽しむのは難しいことではありません。自分たちの出したゴミを帰りに持ち去ればよいのです。わたしたちがこの話を広め、手本を示したなら、次の年には取り除かねばならないゴミはずっと減ることでしょう」

クリーンアップ・オーストラリア・デーおよびクリーンアップ・ザ・ワールドに関する情報をもっと知りたければ、www.cleanuptheworld.orgへ。



(FREELENS Pool) Tack/Still Pictures

Act local

アン山に登る。彼らはたくさんの装備を持参する——しかし微笑みだけを持って帰ってくる。山でゴミを散らかすことは法律違反だが、この法律は強制力に欠けている。そして訪問者たちの数に比べて、ゴミ箱も足りないんだ」。

彼は、人々が脆弱な環境を訪れるのを止めることには反対している。「ぼくは自然とつながりを持つことが、若く冒険好きの人たちにとって世界の無秩序を客観的にとらえるのには一番いい方法だと知った」と説明する。「戸外活動——イカダでの川下り、ジャングルの奥深くへのハイキング、山登りや30メートルの滝の力強さを目撃することなど、何であろうと——にどっぷり身をひたすことで、ぼくは世界が自分よりはるかに大きく、もっと複雑だと悟ったんだ。けれども、もしそうした冒険を体験し続けるつもりなら、自分たちが体験している自然環境を守る必要がある。それには個人、グループ、政府などの間で多くの協力が必要だ」。

彼の大学の冒険クラブの支援で、アズミルは「ヌアン山運搬管理システムプロジェクト」をスタートさせた。これは人間の行動パターン——どこへ行くか、どのくらい長く滞在するか、どんな設備を利用するかなど——を観察し、報告するものである。そして、地域の木々や動物たちを、森林局の助けで記録する。「大学の休みの間、プロジェクトのメンバーが山に登り、どのくらいの人があるか数え、山登りするのか、キャンプするのか、それとも単に日帰り旅行者なのかを計算して、」と彼は言う。「われわれは袋を持参して、運べるだけたくさんのゴミを持ち帰るんだ！」

「山をきれいにすること、そして管理システムを改善することによって、人々が何代にもわたって来て楽しめるような、環境保全の上で持続可能な旅行目的地を作り出すことができる」と彼は説明する。キャシーも同意して言うには、「AMASのメンバーたちが教えてくれたのは、自分たちの地域や環境の未来を心にいだく若者は、自らの生活のあり方を変える力を持っているということです」。



黄金比

Golden mean

美は数字で表現できるか？ ドイツの哲学者、アドルフ・ツァイジングはそれを肯定した。彼は黄金比、数値「ファイ(Φ)」——数字で表わすと1.6180339887——で定義される比率の中に美を発見した。これはいろいろな美しいものの中に見つけることができる。ツァイジングは木の葉の葉脈、オウムガイの構造、そして水晶の構成などの配置の中に黄金比を確認した。パルテノン神殿とシャルトル大聖堂は、両者とも黄金比が当てはまる建築要素を持っている。ウェルギリウスのアエネーイス叙事詩における文節の長さもそれに合っているし、作曲家バルトックの和音構成のいくつかも同様だ。レオナルド・ダ・ヴィンチはモナ・リザを描いた時に意識的に黄金比を使ったと信じていて、学者たちは彼女の謎めいた顔のプロポーションにその比を見つけ出した。



星の道しるべ

Star signs

すべての道がローマに通じるわけではない。しかし、もし方法を知っていれば、星を見つめることは目的地へ着く助けになる。船乗りたちは何世紀もの間、しるべのない海洋で進路を探すのに天文航法を利用していた。インド洋を航海するアラブ人たちは、詩を暗誦することで星の位置を記憶した。そしてポリネシア人たちは、ヘチマの底に星の地図を焼き付けた。北極星に向かえばいつでもあなたは北を指しており、さらに北半球では北極星と水平線の間の角度が、赤道を基準とした位置、つまり緯度になる。1789年に反乱を起こした乗組員たちに放り出されて漂流したバウンティ号のブライ船長は、磁石と天文の知識だけをたよりにボートでテイモールまで6,700キロを無事航海した。



悪臭のするバラ

Stinking rose

古代ギリシャ人たちは未開の地の女神、ヘカテへの夕食の供え物として、ニンニクの房を十字路に置いた。エジプト人たちはこの植物自体を神としてあがめた。中央ヨーロッパ人たちはニンニクを吸血鬼やオオカミ人間、悪魔を寄せ付けないうために使った。ニンニクはビタミンC、ビタミンB6、そしてマンガン^{マン}をふくみ、生のままつぶれるとアリシンを放出する。抗菌性のあるアリシンは感染症を防ぐ。二つの世界大戦中、ニンニク入りの湿布を傷口に貼って細菌を殺した。この植物は東南アジアでは昔から薬用として使われており、その汁を耳の中にとらして痛みを治したり、ニンニクの塗り薬を熱、せき、そして鼻の病気などに処方したり、コレステロールを下げるために使ったりした。避けがたい唯一の問題は、息が臭くなること。悪臭のするバラという異名は、だてにつけられたわけではない。



初期の風呂

Early baths

天然の温泉は何千年もの間、人々を健康に保ってきた。イタリアのメラーノにある温泉は5千年にわたって人々に利用されてきた。西洋医学の父ヒポクラテスは、黄疸^{おうだん}やリウマチの治療のために長風呂を推奨した。事実、古代ギリシャの哲学者たちは温泉で集会を持ち、つい最新の黙想の結果を交換し合った。温泉の薬効は、その豊富なミネラル成分にある。お湯は水よりも溶存物質を多くとどめることができ、温泉の熱湯は地表にしみ出るまでに途中の岩からミネラル成分を拾う。そして入浴者の身体も、骨や歯を強くするカルシウム、傷の治療に効果のあるナトリウム、赤血球の機能を高める鉄分などのミネラル成分を吸収する。



活性薬

Active medicine

シャワーを浴びながら頭皮をマッサージすると気持ちがいいのはなぜだろう？ どうして笑うと楽しくなるのだろうか？ ランニングやスポーツをして‘無我の境地’に入っている時は、何が起きているのだろうか？ 強い幸福感、自信、そして満足感などの感情は、脳内にエンドルフィンと呼ばれるホルモンが自然に分泌されることで起こる。運動中、脳が刺激されると血流中に分泌されるエンドルフィン、苦痛に感じる要素をブロックし、血圧を下げることで、自然の鎮痛剤の作用をして幸福感を誘導する。エンドルフィンはストレスに対する身体の反応を抑制し、消化を助け、気分をよくする作用にかかわっていると考えられている。それは調和のとれた循環だ。笑ったり外で走りまわったりすると気持ちよく感じる。すると脳はエンドルフィンを分泌する。そして、それまで以上にいい気分になることだろう！



自然により良く

Naturally better

乳牛は商業ベースの酪農場で穀類を与えられ、野原で草を食べている牛よりも多くミルクを出す。それはわれわれにとって良いことではないか？ 必ずしもそうとは言えない。乳牛は決まった量のビタミンや栄養素を牛乳の中に移す。だから生産する牛乳が多くなればなるほど、栄養価は薄まる。また、新鮮な牧草は穀類や干し草よりもずっと多くのビタミンEをふくんでおり、そのため新鮮な牧草地で放牧すれば食物中の栄養分は増加する。同様に、農場の庭や畑で放し飼いになっている鶏が産んだ卵には、小屋に押し込められた鶏の卵に比べて約2倍の量のビタミンEと6倍の量のベータカロチンがふくまれている。だから動物たちを自由に放牧させることは、自然に良く、一般的に動物にもやさしいだけでなく、もっと良い食品を生産することにもなる。



日差しを感じて

Feeling sunny

外が寒くて曇っている時、人々はどうして憂うつな気分になり落ち込むのだろうか？ 太陽の光、もっと適切に言えばわれわれがそこから得るビタミンDが、精神を高揚させ、幸せな気分にしてくれるのだ。じゅうぶんなビタミンDを取ることができなかつたら、われわれは落ち込み、疲れやすくなり、また骨は弱まり、骨折する。必要なビタミンDは栄養剤や特定の食物からも摂取できる——1日に15ミリリットルのタラの肝油、15匹の丸ごとのイワシ、15カップの栄養強化牛乳、あるいは特別なビタミン錠剤などだ。しかし、もっと良い選択肢がある。必要なのは、外で——日焼け止めを使う使わないは別として——遊ぶか、立つか、座るか、眠るか、あるいはリラックスすること、それも1日にたった15分！ どうしてかって？ 実はビタミンDはビタミンではなく、われわれの身体が自分で作り出す特殊なホルモンだが——決定的な要素は、太陽の光なのだ。

自然の

不思議

7 natural wonders

第3回TUNZA-NEAYEN会議 開催レポート



2007年9月17日から21日にかけて、UNEP TUNZA 第3回北東アジア青年環境ネットワーク会議(以下、NEAYEN会議)が東京と千葉で行なわれました。今回の会議のテーマは「持続可能な消費と気候変動」。今最も注目されている環境問題である気候変動について、青年にとっても身近な「消費」の観点から考えていきました。

【執筆】エコ・リーグ インターナショナルチーム(菊地理美、新宅あゆみ、青木えり、原英智)

Day 1 9月17日

1日目はガイダンスのみ。各国より集まった参加者は、発表の準備をしたり、ゲームを通じて交流を深めたりしました。

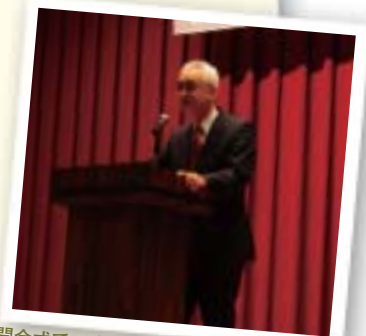


プレゼンテーションを準備する参加者たち

Day 2 9月18日

2日目のプログラムは、千葉大学との共催でした。朝早く起きてバスに乗り込み、宿舎から千葉大学西千葉キャンパスへと向かいました。

いよいよ開会式。UNEP韓国委員会のJae Bum Kim事務局長から開会の挨拶、UNEPアジア太平洋地域事務所の西宮洋次長から祝辞、千葉大学の古在豊樹学長から歓迎の挨拶をいただきました。



開会式でスピーチを行なう古在学長

NEAYENとは?

NEAYENは、北東アジア青年環境ネットワーク(North East Asia Youth Environment Network)の略称で、中国、日本、韓国、モンゴルの4カ国が参加している。2005年1月に、国連環境計画(UNEP)が行なう世界規模での青少年向け戦略“TUNZA”の一環として設立された。北東アジアにおける青年と青年団体の環境保全活動を活性化させることを通じて、持続可能な社会作りに貢献することを目指し、共同キャンペーンの実施や情報交換を行なっている。

NEAYEN会議は年に一度、4カ国から計50名を集めて行なわれる。環境活動を行なっている15~24歳の青年が対象。次回は2008年夏にモンゴルにて開催予定。



午前中はTUNZAやNEAYEN、北東アジアの4カ国について、基本事項を確認するためのプログラムです。この日のプログラムは一般公開され、日本の人々にNEAYENを知ってもらうという意味合いもありました。

まずはNEAYENの概要や昨年行なわれた第2回NEAYEN会議、今年6月に4カ国それぞれで行なわれた「世界環境デー」のキャンペーン、今年8月に行なわれたTUNZA国際青年会議について、プレゼンテーションが行なわれました。



NEAYENの年間活動報告の後、質問を受け付ける発表者たち

続いて、4カ国それぞれの代表者によるパネルディスカッションが行なわれ、各国で特に重要視されている環境問題などについて説明がありました。



環境ISO学生委員会の活動紹介



環境サークル「Sun & Co.」による折り紙体験

午後は、千葉大学の学生によるプログラム。千葉大学は、大学全体で環境に対して先進的な取り組みを進めており、学生環境サークルも多数活動しています。当日は、4つの環境サークルによる活動紹介が行なわれました。海外にはない活動も多く、参加者は興味深そうに聞いていました。プレゼンテーションの後は、参加型のワークショップが開かれました。参加者はグループに分かれ、折り紙や風呂敷、茶道といった日本文化体験や、放置自転車の修理をするサークル活動の体験、キャンパス内のエコスポット見学ツアーなどを楽しみました。



環境サークル「再転車(りてんしゃ)活用委員会」の活動体験



茶道体験にて、もてなしを受ける参加者

夕方には、イオン^{イオン}柏ショッピングセンターへ見学に出かけました。イオンは環境に配慮しているスーパーとして知られていますが、柏店は全国でも数少ない「エコストア」という特別なショッピングセンターです。壁面緑化やソーラーパネルなど、店舗の随所に工夫がなされていて、参加者からは驚きの声が上がりました。

夕食は千葉大学松戸キャンパスへ。バスを降りてから食堂までの道のりには、なんとたくさんのキャンドルが！夜ならではの計らいに感動しつつ、千葉大学園芸学部の農場で採れた新鮮な果物や野菜を使った立食パーティーを楽しみました。



イオン柏ショッピングセンターにてソーラーパネルを体験する参加者たち



夕食を楽しむ参加者と千葉大学学生スタッフ

Day 3 9月19日

3日目は、会議のテーマ「持続可能な消費と気候変動」にフォーカスします。午前中は、国連大学の安井至副学長にテーマについての講演をしていただきました。その後、各国の青年が気候変動についての各国の状況や活動、消費について考えるところなどを発表しました。

午後は、モンゴルと日本の青年による青年環境活動の報告。その後、テーマについて、グループに分かれてディスカッションを行ないました。これまでのプログラムを通じて考えたことや、各国の状況などを話し合い、その後どのような消費行動が気候変動の抑制に有効なのか考えました。夜は文化交流。民族衣装やおそろいのTシャツなどを着用、各国ごとに出し物を行ないます。笑いの中にも環境保護へのメッセージを込めた、手の込んだ出し物をそれぞれに披露し、大盛況でした。



基調講演を行なう安井先生



質問をする参加者



文化交流にて、日本の踊りに加わるモンゴル人参加者たち

Day 4 9月20日

4日目は朝からワークショップ。北東アジアの青年環境活動を活性化させていくために、この会議の参加者たちは何ができるのかを話し合いました。「持続可能なネットワーク構築」「環境教育ブックレットの作成」「政策担当者へのアピール」「世界環境デーでのキャンペーン実施」「NEAYENの長期的戦略」の5つのグループに分かれ、アクションプランを作りました。

より実効性のあるアクションプラン作りのため、日中韓の環境情報を発信するNGO「東アジア環境情報発信所」代表の廣瀬 也氏、ライフサイクルアセスメントの専門家である社団法人産業環境管理協会の中野勝行氏よりアドバイスを受けながら議論を進めました。

昼食後は韓国と中国から、青年環境活動の報告がありました。その後はワークショップを続行。全員が立ち上がって模造紙を囲んで話し合っている光景が見られるなど、どのグループの議論もかなり白熱していました。

夕食はNEAYEN会議に協賛した日本のバイエルから提供を受け、和食のレストランでディナーを楽しみました。

夜は、一人ひとりが会議の感想やこれらに向けての決意を発表しあいました。会議最後の夜とあって、宿泊部屋に戻ってから遅くまで話し込む姿が見られました。



話し合いを進める参加者たち



ワークショップでアクションプランを作成した参加者と廣瀬氏(後列右端)

Day 5 9月21日

5日目はまとめの日。各グループの代表から、ディスカッションとワークショップの成果をまとめた文書“Tokyo Initiative”が発表されました。今後もアクションプランを深め、実行していくことを誓いました。発表会では国連大学高等研究所の名執芳博先生より、各グループのプランにコメントをしていただきました。

閉会式では、5つのワークショップそれぞれの代表者“Youth Leader”から、今後のアクションプラン実行に向けた決意が語られました。名執先生から激励のお言葉をいただいた後、日本バイエル代表のミハエル・ポートフ氏より閉会の挨拶をいただき、4か国の代表者に参加証明書が手渡されました。

閉会式でコメントをされる名執先生

ポートフ社長による参加証明書授与



参加者・スタッフの声

今回の会議では、参加者がより広い視野で多面的に環境活動を考えアクションに移してもらえよう準備してきました。当日は私たちも参加者と交流する中で、「自分の国でもこの活動をしたがどうすればいいか」などと声をかけてくる積極的な学生がたくさんいて、互いの活動を発信していく大切さを知りました。国が違って、伝えたいこと・活動してほしいことは共有できるということや、それらを共有することの楽しさを実感でき、とても貴重な体験になりました。

(千葉大学園芸学部3年・新田絢香
〔千葉大学学生スタッフ〕)

私はテーマに関するプレゼンテーション班の一員であり、「持続可能な消費と気候変動」について公害問題を教訓に「技術とモラルの双方から環境問題に取り組む必要がある」という趣旨内容を発表しました。その中で世界的にも注目される“もったいない”に隠れた日本人の自然観である「人間は自然の一部だ」ということを各国の参加者に伝えました。その際に各国の参加者が、「私の国でも同じ考え方がある。これはアジア全体の自然観だから大切にしよう!」と言っていたのがいまでも強く印象に残っています。政治・経済も異なる国々の中で共通する大切な概念が発見でき、これからの青年の活動を考えるにあたっても本当に有意義な会議となりました。

(神戸大学経済学部4年・千葉明日香〔会議参加者〕)

自分もともと環境活動よりも、それらに取り組む人達に興味がありこういった活動を続けている。各国の青年達はどんな想いで活動を続け、この会議に臨んだのだろう。自分の語学力の拙さゆえ、そこまで深く聞けなかったのが残念である。しかし、この会議で得られた多くのこと——各国が肌で感じている問題点・共通の思い・言語が違ってもつながれるということ——は少しでも多くの人に伝えていきたいと思う。全ては伝え切れないが、この機会に集められた各国参加者の思いを形にするためにも、一人でも多くの日本の仲間へ。そして、自分の目の前の仲間たちが海外の仲間達に少しでも思いを馳せるきっかけになればと思う。

(武蔵工業大学環境情報学部2年・小林佑輔〔会議参加者〕)

日本ではエコ・リーグ(全国青年環境連盟)が、NEAYENの窓口団体(National Focal Point: NFP)となっています。NEAYENの活動に関するお問い合わせは、global@eco-2000.net(エコ・リーグ インターナショナルチーム)までお願いします。

持続可能な社会をめざして

私たちは  UNEP (国連環境計画) の活動をサポートします。

Aiming at sustainable society


We support the work of  UNEP (United Nations Environment Programme)



(特別協賛サポーター) 五十音順

 キヤノン株式会社

 サカタインクス株式会社
Visual Communication Technology

 三和シャッター工業株式会社

 情報産業労働組合連合会

 杉田エース株式会社

 T&D 保険グループ
 太陽生命  大同生命  T&Dフィナンシャル生命

 日本航空

 日本パレットレンタル株式会社

 Bayer バイエル株式会社

 富士フイルム株式会社

 毎日新聞 

(環境関連協賛サポーター) 五十音順

 株式会社アースシップ

 E&E Solutions Inc.
イー・アンド・イーソリューションズ株式会社

 株式会社 エッチアールディ

 TAKE100
PURE BAMBOO CLOTH



Katarzyna Rozek (Poland)/Ecology in Focus

踏みつぶさないように気をつけて...
Tread carefully...

自然とのつながりを感じて
connect with nature